

微小乳頭型尿路上皮癌の1例

◎草野 瞳士¹⁾、安田 貴氣¹⁾、岡部 寛央¹⁾、小島 恵奈¹⁾
長崎労災病院¹⁾

【はじめに】微小乳頭型尿路上皮癌は、“inside-out pattern”を呈する比較的均一な胞巣状構造で出現する浸潤性尿路上皮癌の亜型の1つである。臨床的には予後不良の組織型で診断時には筋層浸潤を伴い、脈管侵襲やリンパ節転移の頻度が高いことが知られている。今回、我々は微小乳頭型尿路上皮癌の1例を経験したので報告する。

【症例】50歳代男性。肉眼的血尿を主訴に近院を受診。超音波検査にて腫瘍性病変を指摘され、精査目的で当院紹介。膀胱鏡検査では、左尿管口周囲から頸部にかけて巨大な広基性腫瘍を認め、MRI検査では筋層への浸潤が疑られ、リンパ節転移も確認された。診断目的に尿細胞診とTUR-Btが施行された。

【細胞診所見】壊死性背景に異型細胞が孤在性から腺房様集塊や血管軸を有さない小型～大型乳頭状集塊で出現していた。異型細胞の核は、比較的均一な類円形でクロマチンは微細顆粒状に増量し核小体が認められた。また、一部の異型細胞では細胞質内空胞も認められた。免疫細胞化学染色で、異型細胞集塊辺縁部にEMAが陽性となり、

“inside-out pattern”が確認された。

【組織診所見】TUR-Bt標本では、粘膜で異型細胞が乳頭状に増殖しつつ、粘膜下結合組織では、間質の空隙内で小集塊の癌胞巣が浸潤性に増殖していた。また、一部では細胞質内空胞を有する異型細胞も認められた。免疫組織化学染色で異型細胞は、GATA3陽性で、微小乳頭状増殖を示す胞巣の集塊辺縁部にはEMAが陽性となり、細胞極性の逆転を示す、“inside-out pattern”を示した。脈管侵襲と筋層浸潤も認められた。

【結語】微小乳頭型尿路上皮癌は、予後不良な組織亜型である為、早期診断が非常に重要である。細胞所見を理解し、EMAの免疫細胞化学染色で“inside-out pattern”的証明は診断精度の向上に寄与すると考えられた。

連絡先：長崎労災病院 病理診断科 0956-49-2191